

# 『行人』論

——共振する沈黙への旅立ち——

## 序

「行人」——道を行く人。旅人。そして、使者。漱石が、激しい病と闘いながら執筆したこの作品の題名は、ある人間についての「性格」あるいは「役割」の規定であると同時に、その人間が外界や人とかかわる行為の過程をも示している。

おそらく「行人」とは、一郎だけでもなければ二郎だけでもない。<sup>(1)</sup>その意味で、この作品の主人公を一郎に限定し、二郎を単なる傍観者の位置に置いてきた、従来の『行人』論の発想の前提は、今いちど問い直さねばなるまい。

作品中に描かれた幾つかの短篇と、さらにその中に挿入されたエピソードの集合は、必ず「結婚」、「家族」といった問題を喚起しつつ、それぞれに「旅」と「使者」の使命の両義性の間で物語の過程を紡ぎだしている。そして、それらの「旅」を歩む「使者」たちは「Keine Brücke führt von Mensch zu Mensch. (人から人へ掛け渡す橋はない)」(摩勞―三十六)に拮抗する人ことば√の可能性を

## 王 理 恵

まさぐっているともいえる。その意味で「使者」とは、何事かを誰かから誰かに伝えるその人であると同時に、何事かを伝える人ことば√そのものの意味でもあるのだ。

「使者」として、どのような「道」を「行く」べきなのか。この問いかけが最も端的に表われてくるのは、兄から直をめぐる「報告」を依頼されながら、その使命をついに果たし得なかった、二郎の変化の過程においてである。自ら「報告者」であることを拒んでしまった二郎の足跡を描く、この「旅」の「道」筋は、一見分散しているかに見える多くのエピソードをつなぎ合わせてゆく。それは人と人との、あるいは「男」と「女」の、本来のコミュニケーションのあり方を探し続ける「旅」であったといえよう。

二郎の「旅」の「道」筋に沿いながら、しかし、私たち読者がひとりの「行人」として物語を「旅」するとき、小説『行人』は、人と人との間をつなぐ「道」、人と人との間をつなぐ「使者」のあり方、そしてまた、その「使者」が発話する人ことば√のあり方を読者の前に開示しつつけるテキストとなるのである。

「行人」という題名と関わる「使者」とは、人と人との間にあってその想いを掛け渡す使命を担った「報告者」ということができる。その「報告者」の使命を、二郎は物語の冒頭から担わされた存在であった。彼はお貞さんの縁談相手の「様子を見て来」る、ように「母から依頼」（友達——）されて、大阪の岡田の家を訪ねたのであった。

岡田とお兼は二郎の両親が執り持った夫婦であった。岡田の同僚の佐野は、岡田を介してお貞を知った。佐野と会見した二郎は、母に宛てた手紙で佐野の印象を報告した。彼の人柄を保証するのに二郎は仲人である岡田夫婦の仲の良さを書き添えた。

二郎はふだん家の中でも両親（主に母）から家族員の情況だとか、兄や嫂の気性について訊ねられたり相談されたりする存在だった。そのような彼の前に開かれていくエピソード群は、それぞれに「報告」をめぐる問題を喚起しながら立ち現われる。そこに浮かびあがる問題を彼に明確に提示する最初の一撃が、和歌山で発された一郎の「依頼」の△ことば▽であったのである。

一郎の「依頼」の△ことば▽は、あまりに突然で、思いもよらない衝撃的な内容とともに、その△ことば▽の構造そのものによつて、二郎の「存在」を根底から突き動かしてしまったのであった。

二郎をそんなにも驚愕させた△ことば▽は、このように与えられた。

「二郎己は御前を信用してゐる。御前の潔白な事は既に御前の言語が証明してゐる。それに間違はないだらう」

「ありません」

「夫では打ち明けるが、実は直の節操を御前に試して貰ひたいのだ」

自分は「節操を試す」といふ言葉を聞いた時、本当に驚いた。当人から驚くなといふ注意が二遍あつたに拘はらず、非常に驚いた。只あつけに取られて、呆然としてゐた。

（兄—二十四 傍点引用者以下同様）

もちろん、「節操を試す」という△ことば▽の意味それ自体があまりに露骨に二郎の耳に響いたということが、彼の驚きの最大の要因に違いない。何故なら「節操を試す」実践行動とは、「御前と直が二人で和歌山へ行つて一晩泊つて呉れ、ば好い」（兄—二十四）ということだったからである。

しかし、二郎の衝撃は、「直の節操を試す」という△ことば▽ではなく、「節操を試す」という△ことば▽にあった。ここでは誰の節操なのかということそのものが、実は両義的なのである。

「直は御前に惚れてるんぢやないか」

（兄—十八）

権限社頭で一郎が発した△ことば▽は二郎に、直を疑い、その相手として二郎をも疑っていることを明示した。この△ことば▽が与えられたあとは、二郎はどうしても、直との関係の中でしか自分の存在を意識することができなくなる。この最初の一撃が、二郎を、直との関係性に呪縛してしまったのである。

そのような二郎に、「節操を試す」という△ことば▽は直の節操

だけではなく、実は、というよりはむしろ、自分の節操をも試すことを意味するものとして聞こえてしまったはずだ。そこに、二郎にとっての決定的な衝撃があったのである。

一郎は自らの△ことば▽によって、二郎を直との関係の中にたたき込んだ。しかし、この「依頼」においては、二郎と直とを明確に切り離そうと強弁する。

「二郎已はお前を信用してゐる。けれども直を疑うてゐる。

しかも其疑ぐられた当人の相手は不幸にしてお前だ。但し不幸と云ふのは、お前に取つて不幸といふので、己には却つて幸になるかも知れない。と云ふのは、己は今明言した通り、お前の云ふ事なら何でも信じられるし又何でも打明けられるから、それで己には幸ひなのだ。だから頼むのだ。己の云ふ事に満更論理のない事もあるまい」

(兄—二十五)

一郎は二郎のことを、血を分けた「弟」として「信用する」のである。対等な人格としてではなく、「血縁」を媒介にのみ「兄」に信用されている「弟」。しかしその一方で、一郎には二郎が「奥の奥の底にある」「感じ」(兄—十八)を明かさないう者、「軽薄な挨拶」(兄—十九)をする者として映つてしまつていた。そうであればこそ、二郎が一郎の疑う直との関係を否定するとき、その言葉で一郎は信じることができない。そればかりか、「御前の顔は赤いぢやないか」(兄—十九)と、言葉と態度の矛盾、二律背反を指摘するのだ。

いったん言葉と態度を引き裂いて解釈されてしまった後、二郎は

もはや「御前を信用してゐる」という一郎の△ことば▽をそのままに受けることはできない。一度決定的な力をもつ一撃によって促された運動は、それと同じ力で押しとどめられない限り止まることはない。

「信用してゐる」から頼むのだと言つた一郎の「依頼」の△ことば▽は、「依頼」の実施そのものを不可能にする機能を内在させてしまつていたのである。二郎は、たとえ「依頼」を受けて嫂と和歌山へ行つても、その「報告」を、決して兄は信じてくれないだろうということを痛感したはずだ。だからこそそのような「報告」を「馬鹿らしい」と言い放ち、「下らない」(兄—二十四)と一口に退けてしまおうとするのだ。

けれど、人格や倫理、名譽上の問題だと言つて免れようとする二郎に、一郎は「依頼」から降りる余地を与えない。二郎はどうあつても「依頼」を引き受けざるを得ないところに追いつめられてゆく。

この「依頼」を引き受けることによって、二郎はどうにも動きのとれない二重拘束の状態に投げ込まれてしまうのだ。彼の意識はそこに呪縛されたまま、三つの位相の中で引き裂かれてゆくのである。

第一は、△ことば▽の位相である。「お前の言葉を信用する」と言われながら、言葉と態度を分離され、態度から言葉を疑われている。第二は、血縁関係の位相である。血のつながつた「弟」として信用されているながら、直との関係性においては、血縁の絆を断ち切る者として疑われている。第三は、「節操」の位相である。直の「節操」を試し、その結果を伝えてくれるように頼まれた「報告

者」として信用されていながら、その直に惚れられている者としては疑われているのである。

一郎の「依頼」は、二郎をこのような二重拘束の状態に呪縛し引き裂きつつ、直との関係の中へ投げ込んでいったのだった。どのような△ことば▽を発し、どのような態度をとったとしても、二郎は「信」と「疑」の両極に引き裂かれてしまう。そのどちらを選ぶかは一郎に任されている。そして何を一郎に選ばれたとしても、結局は直と二郎の「節操」は△黒▽と出るのである。

しかしながら、「依頼」の△ことば▽は、一郎にも二郎にも未だ気づかれていない、もうひとつの、一撃を内在させていた。「依頼」は、そこに孕まれた疑惑ゆえに、これからの二郎と直の関係の可能性を先取りして二郎に意識させてしまうという機能をも持っていたのである。一郎の△ことば▽によってひとたび直との関係の中へ投げ込まれた二郎は、直とじかに接し、言葉を交すことで、彼女とのかかわりの場を開いていくことになる。一郎との関係性に捉えられた「弟」でも「報告者」でもない、直との関係を聞く「当事者」としてかかわる存在となるのである。直と二郎が彼らのかかわりの場を次々と開いていく、その最初の一撃を二郎に与えたところに、一郎の「依頼」の△ことば▽が最も危うい力が閃めいているのである。

## II

直と和歌山へ向かった二郎は、一郎の「依頼」の△ことば▽に呪縛された存在であった。直に対して「実験者」・「観察者」としてしか関われない二郎を、直は「貴方」らしくないと感じ、彼に向かっ

て再三呼びかけるのだった。

「貴方何だか今日は勇気がないようね」

「貴方今日は珍らしく黙つてゐらつしやるのね」(兄―二十七)

「何故そんなに黙つてゐらつしやるの」(兄―二十八)

直の呼びかけの内に「二人でもつと面白く話さうぢやありませんかと云ふ意味」(兄―二十八)を感じとりながらも、一郎の△ことば▽に捕えられている二郎はどうしても兄の存在を介在させてしまふ。

「あなた兄さんにそんな事を云つたことがありますか」

「兄さんにも左右いふ親しい言葉を始終掛けて上げて下さい」

(兄―二十八)

二郎は投げかけられた直の△ことば▽を、直と二郎の関係性から一郎と直の関係性へ「変換」してしまうのだ。そうすることで、直と自分を「嫂」と「弟」という家族の系図の上にはめ込んでゆく。二郎の△ことば▽は「兄の為」(兄―三十一)に使われ、直との間で互いの想いを伝達するためには機能しないのだ。

「報告者」として、また「弟」としてのみ直と関わる時、二郎はこの場で彼女の△ことば▽をじかに受け留める主体を持たないのである。

別の関係性に言葉を「変換」してかかる二郎の前に、直は△沈黙▽を選ぶ。それによって、この場の「自分」と△ことば▽を、別の関

係性での「解釈」や意味づけから守ろうとするのだ。そして△沈黙△は、この場に「貴方」として、「妾」と向かい合ってほしいという願いをのせた、直から二郎へのメッセージでもあった。

直の△沈黙△は、彼女の△ことは△が「今・ここ」に居て向かい合う「貴方」、二郎自身に投げかけられていることを彼に気づかせていくのである。

「正直な所姉さんは兄さんが好きなんですか、又嫌なんですか」

自分は斯う云つて仕舞つた後で、此言葉は手を出して嫂の頬を、拭いて遣れない代りに自然口の方から出たのだと気が付いた。嫂は手帛と涙の間から、自分の顔を覗くやうに見た。

「二郎さん」

「え」

此簡単な答は、恰も磁石に吸はれた鉄の屑の様に、自分の口から少しの抵抗もなく、何等の自覚もなく釣り出された。

(兄—三十二)

二郎は、まさに人と関わることでそれ自体として、△ことは△を発することがありうるということに気づくのである。そうであればこそ、直の呼びかけに「え」と相槌を打つ、その一言の重みと出会うのだ。

そのような△ことは△は、相手に何事かを意味しようとするものではない。まして相手の△ことは△の真偽を疑ったり、「腹の中」をさぐるものでもない。ただ応答することが「少しの抵抗」もなく

「何等の自覚」もいらない△ことは△。そして、△ことは△を交すことで開く、かかわりの「愉快」(兄—三十八)さ。二郎にとってそれはまさに「かかわりの触手」としての△ことは△との出会いであったのだ。

二郎にとって、新しい△ことは△の発見はまた、そういう△ことは△を使いたかった「自分」の発見でもあった。彼は「報告者」としてではなく、「かかわりの触手」としての△ことは△を交す、この場の「当事者」で在りたいと願う「自分」に気づくのである。

目の前で涙をぼろぼろ流して泣く直に△ことは△をかける。停電の暗闇の中で「自分の傍に坐つてあるべき筈」(兄—三十五)の直に向かって呼びかける。最後に壮烈な死を望んでいることを知り、その理由を「もつと突き留めてみた」くなる(兄—三十八)。

直への△ことは△の働きかけの変化は、彼の、△ことは△に対する自覚の深まりを表わしているかのようだ。「自分」の△ことは△を発見し、獲得していく過程の中で、二郎は一郎の△ことは△の呪縛から解かれ、直とのかかわりの場にじかに向き合う「当事者」となるのである。

二郎が直との関わりの中で一郎の△ことは△の呪縛から解かれていったように、彼女も自ら発した△ことは△によって、長い間△沈黙△し続けて来た「自分」に気づかされていたのだ。

直は自分のことを「腑抜」(兄—三十一)だと二郎に語る。人の腑に落ちるように何事かを伝えたり表わしたりする起点となる、確かな「自分」の位置「腑」を、彼女は一郎との生活の中で喪失してしまっていた。もはや生きていく気力の起源となる「腑」が、直からは「抜」けてしまっていたのだ。

自分を「腑抜」と語った直は、二郎に、だからいつも「死」を考へ続けていると告白する。直が望む「死」は、「大水に攫はれる」とか「雷火に打たれる」（兄―三十七）といった、あたかも死の瞬間に「自分」が生きた証を全て凝縮しようとするかのような、壮絶なものであった。

直は、長男である一郎の妻、長野家の嫁としての生活の中に、「自分」の心を持って生きる望みを失っていた。「自分」の想いを△沈黙△の奥に封じ込めて暮らすうちに、「腑抜」・「魂の抜殻」になつてしまつたのだ。その言葉には、悲哀も皮肉もこめられてはいない。彼女は「自分」の生を諦めてしまつてゐるのだ。

「死」だけがありのままの「自分」の「生」の証であることを、直は二郎に語つた。このとき、彼女はおそらく初めて「自分自身」として他者と関わりながら発する△ことば△の触手に触れたのだ。そして今まで見失つてゐた「自分」を、「抜」けてしまつたと思つてゐた「自分」の「腑」を、思い出し始めているのである。二郎との関わりの場に、直もまた「自分」として生き始めたのである。

### III

和歌の浦から帰つた後も、二郎は一郎に直のことを報告しないままであつた。直はあたかもそれが長野家の中で「自分」の存在を確かめる術でもあるかのように、唯一血のつながつた芳江を自分に引き付けてゐた。そして一郎は一人書斎にこもつて書物と己れの思索の中にますます沈んでゆくようにみえた。二郎はそんな兄と嫂を見ながら、自分が兄に報告しないことが二人の関係をより混乱させているようにも思われ、報告するかしないかの決断に迷うので

ある。

そんな折に語られた父の「盲目の女」をめぐる話は、二郎にとつて、「報告」の△ことば△と、「報告者」の役割とについての寓話として響いたのであつた<sup>(3)</sup>。

その話の中で、父は二郎と同じく「報告者」の役割を担わされる。二十年前に別れた女の身の上をたずね、報告するよう父は友人に頼まれたのだ。しかし友人には別れた女と「新しい関係を付ける氣」（帰つてから―十五）はなかつた。

和歌山で、「当事者」として関わることを知り始めた二郎にとつて、「報告者」の役割は、「依頼者」から関わりを開こうとする意向を託されて、相手との間を往復運動することなのである。「依頼者」の意向を相手に伝える場、相手の意向を持ち帰って伝える場という二つの関係性で「報告」が成立して初めて「報告者」は両者を媒介する存在になり得るのだ。そうであればこそ、「依頼者」が関わりの意向を「報告者」に託さないまま、相手の情報のみを入手しようとしても、その「依頼」は決して満たされないのである。

「依頼者」が意向を託さなければ、「報告者」は伝えるべき△ことば△をもたないままである。△ことば△を与えられていない「報告者」が相手と対面したとき、彼の発話はどうあつても「軽薄」な「虚偽」（帰つてから―十二）にしかならないのである。

それだけではない。「依頼」によって赴き、相手と対面することによって、「報告者」はその場における「当事者」とならざるをえないのである。実際に女と会つてその盲目であることに戸惑いを感じる父と、二十年前別れた男の代理で来た父の前で心を揺らす女。実際に向かい合い、△ことば△を交すところに関わりの場は開かれ

ていくのだ。ひとたび「当事者」となり、相手と関わった「報告者」には、もはや「依頼者」への客観的な事実の「報告」など不可能なのである。こうして「報告者」は、媒介し掛け渡すはずであった両者の、それぞれの関係性の間に引き裂かれてしまうのである。

一郎が盲目の女の苦悩する姿に己れの姿を重ね合わせて父の話を聞いているその傍で、二郎は幾重にも封じ込められた「報告」のあり方を認識し始めるのだ。

さらに二郎の眼差しは、「依頼者」である一郎に決定的な欺瞞があることを見抜く。一郎は盲目の女に「同情」し、父の「輕薄」を「腹の中で泣いた」(帰つてから一二十一)。それは「依頼者」である一郎の、「報告される対象者」への転倒に他ならない。彼は、報告の対象に追いやられた女の側に立てる人間なのだ。しかし彼が盲目の女と同じ位置に置かれた直に、想いを馳せることは決してないのだ。

二郎は父の語る「盲目の女」に纏わる話によって、「報告」をめぐる人間関係と△ことは▽のあり方を明確に捉えた。そのことはまた、一郎が抱え込んでいる問題をはっきり認識することでもあった。

人間の「本体」(兄一十二)を掴むこと。それが、人の心の「本当の所」(兄一十八)で交わることを求めて止まない一郎の「実際問題」(兄一十二)であった。一郎は人間の深層に潜む「本体」を突き詰めるために、学者である彼が慣れ親しむ、西欧の近代科学の学問研究を導入する。それは、「人間」と「自然」を研究する「主体」と研究対象である「客体」とに分離し、実験・観察によって「表層」を剥ぎ取り「深層」にある本質を究明する、という方法手

段であった。

だが、「自然」を対象とする「研究」の目を「人間」が結ぶ家族関係に向けたところに、一郎の苦悩は端を発している。

「研究」方法に則った一郎のあり方が和歌の浦での「依頼」の△ことば▽となつて、二郎を二重拘束に陥れた。この、二郎を呪縛した二重拘束は、まさに一郎の苦悩の現前した構造でもあったのだ。彼は、△ことば▽の位相における「虚偽」や、「血縁関係」「節操」の位相における兄弟・夫婦といった「表面の形式」(兄一十八)を全て斥けようとする。

しかし、人と人との関わり、場から様々な位相を切り離し、己れの「解釈」の場へ持ち去ろうとする「研究」によっては、「現在眼前に居る」(兄一二十)直の「本体」を掴むことはできない。「人間」にとつて、関わりの中から引き離されることは「死」を意味する。何故なら「人間」の「生」は、人と人との組み合わせの場で、相互に関係し合い運動する過程として現象化するものだからだ。

現在一眼前に居る一人。「今」というこの時間を共に過ごし、「貴方」はその胸に私を映してここに居る——そして、「私」もまた人間にとつて「本当の所」があるならば、それは決して別の関係性からの「研究」や「解釈」で追求されるものではない。△ことば▽の触手に触れ、「貴方」を、そして「私」を確認し発見していく過程のはざまに、確かな感觸として、受け留められるのだ。

「家」とも「社会」とも隔絶されたような和歌山の暴風雨の一夜に、直と二郎は新たな「存在」観の地平を開き始めたのだ。それは、人間には「本体」があるとした一郎の前提を明確に差異化しつづけることでもあったのである。

## IV

直は一郎との結婚生活の中で、己れの「解釈」に縛られて苦しむ夫の「性質」を「承知」（兄—二十二）していた。その苦しみを少しでも軽くするために、なるべく「解釈」の材料となるものを与えないように努めていた。それはまた、彼女の「ことば」を一郎の「解釈」から守ることもあったのだ。

けれど、一郎の心の動きを察知し彼の緊張を緩めるための言葉を吐くことを、直は拒む。直はこれら「虚偽」の言葉を「御世辞」（兄—三十一）だと言い放つ。彼女にとって「御世辞」を口にすることは、「自分」の「生」を欺くことであると同時に、人との関わりを自ら放棄してしまうこともあるのだ。

一郎を「解釈」の呪縛から少しでも楽にしてあげたいと願うこと。「自分」の「生」に誠実な「ことば」であること。この両方を満足するために直が選んだのは「沈黙」することであった。

だがこの「沈黙」は、日常の暮らしの中で完全に遂行されるものではない。どうしても発話せざるを得ないとき、直は一郎に「解釈」されてしまうことを承知の上で、「今・ここ」に生きる「自分」の感覚を、誠実に「ことば」にのせて投げかけていくのである。

二郎が和歌山の暴風雨の一夜に「知らぬ間に」（兄—四十二）受け継いだのは、まさにこの直の「沈黙」のあり方だったのだ。

彼は和歌山で、「報告者」ではない、「二郎自身」として直と関わり始めていたのだ。そうであればこそ、二郎が直の姿を「報告」するということは、同時に彼女に関わる「自分」の姿をも「報告」することになる。「報告者」である二郎によって「報告」され

るのは、他の誰でもない、直と二郎自身なのだ。

すでに「節操」を疑われてしまっている直と二郎の関係性を思えば、「報告」はさらに一郎に「解釈」の材料を与えるものにならない。また、二郎が何をどう「報告」したところで、一郎は「ことば」を「解釈」してしまうだろう。二郎の「報告」の「ことば」はこうして幾重にも封じられているのだ。二郎は自らの「報告」が不可能なことを認知した。そのとき彼は「報告者」でありながら敢えて「沈黙」を選ぶのだ。彼もまた直と同じように「沈黙」によって一郎の苦悩を軽くし、また「自分」の「ことば」を守ろうとするのだ。

「依頼」に対し「沈黙」を選んだ二郎は、自ら「報告者」の位置を降り、家を出て一人下宿することを決意する。それは兄弟夫婦の間から自分の存在をはずすことによって、一郎の「解釈」の外に逃れるだけでなく、母やお重、三沢までもが抱いた疑惑を体裁的にも晴らす意味をもっていた。

二郎はそうすることによって、兄弟夫婦が誰の媒介も要らない直接的な関係を結ぶことを期待している。直に一郎を託せるのも、二郎が彼女と同じような人との関わり方を身につけたからだといえよう。一郎の「解釈」を封じ、「自分」の生を誠実に生きるための「沈黙」。それは直が選び、今また二郎が選んだ、「自分」を生きる術であった。その意味で、二郎の下宿は直の「沈黙」を受け継いだ彼の実践行為であったといえよう。新たに、直と二郎の願いをこめた「沈黙の中の共振」が始まることでもあったのである。

このとき、二郎には自覚されていないにしても、もうひとつの、決定的な選択が成されてしまっていた。一郎に対して「沈黙」するこ

とで、彼は暴風雨の和歌山での直と自分との関わりを、二人だけの記憶として守り続けることを選びとったのである。

二郎が「家」を出て独立するということは、兄との力関係から自分の身ははずすことであると同時に、直と二郎の間にじかに開かれた関係性へと、自らを向かわせていくことでもあったのだ。つまり、長野家という「家」・「家族」の範疇の外で、直と二郎が「嫂」と「弟」という関係から離脱した、一人の「女」、一人の「男」として、じかに出会う可能性を切り開いてしまう、という危うさを内包した決断であったのだ。

二郎が家を出た後、彼と長野家の人間の関わり方は、微妙な変化を兆していくことになる。長男である兄を中心とした家内の秩序が崩れていく軌跡が、徐々に、しかし確実に、次男である二郎の下宿を訪れる成員の足跡によって暗示されている。二度めの来訪の際、母はこんな言葉を洩らしていく。

「二郎、此処丈の話だが、一体お直の気立は好いのかね悪いのかね」  
(帰ってから―三十八)

母の口から出る「直」の名を聞いたその瞬間、二郎はそれまで気づけなかった、否、気づくのを恐れて目をそらし、押し殺してきた直への想いが、圧倒的な力で自身の内にあふれ出すのを感じた。それは彼が「弟」として、見つめることを避けてきた心の奥の想いであつた。二郎は自分の存在がもつ危うさに、「恐ろしい夢に捉へられたやうな気持」(帰ってから―三十八)を抱くのである。

長野家から独立した空間の中で、彼は「家」・「家族」から離脱した「個人」としての己れを折出し始めていた。

このとき二郎は「弟」でも「報告者」でもない、一人の「男」として、直という「女」と出会ってしまったのであろう。二郎は直がそれまで彼に送ってきたメッセージを「自分」に向けられたものとして認知し返すのだ。

「自分」の想いと「相手」の想いを出会わせるときに起こる共鳴。その共鳴と共振ほど「恐ろしい」ものはない。何故ならこれは長男を中心にする「家」の「倫理」、兄であり弟であることによる「信用」といった「家族」の「倫理」をつき崩し、「嫂」と「弟」という枠を壊し、直と二郎が一人の「女」と一人の「男」として再び出会うことにつながるからだ。直の、二郎の下宿への訪問は、まさにこのような危うさの中で、またそうであればこそ、新たな共鳴と共振へ向けての最初の一撃としてあつた、といえよう。

## V

二郎の下宿を訪れた直は、狭い部屋の中で火鉢を隔てて二郎と向かい合って坐つた。そして「是迄此方から問ひ掛けなければ、決して兄の事に就いて口を開かない主義」だったものを「丸で逆さまにして、自分(二郎―執筆者注)の最も心苦しく思つてゐる問題の真相を、向ふから積極的に此きへ吐き掛けた」(塵勞―四)のだった。二郎は彼女に起こった変化に驚く。

かつて直が示し、「知らぬ間に」二郎に「乗り移つてゐた」(兄―四十二)△沈黙▽のあり方。それは、「当事者」以外にその関係性と△ことば▽を「変換」せずに、関わりの場を守り続けるというものであつたはずだ。今、直は二郎の前で、一郎と彼女の関係性を二郎と彼女の関係性に「変換」し、語り始めている。そうすること

で、一郎と彼女の関わりを、直ひとりの「沈黙」から二郎と直の二人の「沈黙」へ解き放ち、その共振の中に守り、負っているのだ。

直もまた、あの和歌山の暴風雨の一夜に、忘れていた「自分」の生に気づいたのだ。そして、もう一度「自分」を生きようとして語り始めたのだ。己れが抱く直への想いの危うさを認識した二郎は、おそらく彼女の変化をこう捉えたのであろう。そう思えば尚のこと、二郎は彼に語りかけてくる「直」を未だしっかりと受け留めることのできない自分を「卑怯」(塵勞―四)と自覚するのである。

三好行雄氏は「怖れない女と卑怯な男との間に恋愛のドラマはやはり不在」とした。たしかに二郎は「直」を受け留める主体を未だ持っていないことを自覚している。しかし三好氏の指摘は二郎の自覚の一面を捉えただけにすぎない。「直」を正面から受け留める主体を獲得すること。二郎はそれを、「家」や「家族」といった血縁の基盤から離脱した「個」として彼女の前に立つことであると認識しているのだ。そして同時に、直にも「家」や「夫婦」の「倫理」を踏みはずさずしてしまうことになるのだ、とも。

「卑怯」でなくなることが導く先を思えばこそ、二郎は主体獲得の方へ踏み出せずにいた。そんな彼の胸に、直の「ことば」は「影のやうに暗く」「稲妻のやうに簡潔な閃」(塵勞―五)を焼きつけた。二郎は「直」の「ことば」を投げ込まれたのが「天下に自分の胸がたつた一つあるばかり」(同)であることをはっきり認識した。そして自分だけが直の苦悩をわかることのできる者であることを確信するのだ。ここには明らかに、「怖れない女」直とじかに向かい合う主体を獲得しようとする「卑怯な男」二郎の自覚が示さ

れている。その意味で「卑怯」であることを自覚した二郎は、今まさに「恋愛」に踏み出そうとしている存在だといえるのである。

家の中で「陰鬱な」調子が「段々陰鬱の一方に向つて真直に進んで行く」(塵勞―十二)ような一郎を案じる父母の意をくんで、二郎はHさんに兄との旅行を申し入れた。兄が親愛の情を抱く友人で、また学者でもあるHさんならば、家の中で一人苦悶する兄も己れの想いを語り出すかもしれないと判断したからである。そして彼は「現在の」「兄の自分に対する思はく」(塵勞―二十一)が知りたくて、Hさんに兄の「報告」を依頼するのだった。

「塵勞」末尾に書かれた「Hさんの手紙」は、それまで家族との関わりの間に垣間見ていた一郎の苦悩を、学者であるH氏がその認識のもとに深め捉えるという内容をもっている。それゆえ従来の「行人」論の多くはこの「Hさんの手紙」に描出される一郎の姿に「行人」全篇を読み解く鍵を見出そうとしてきた。しかしながら、「手紙」というH氏の独白で語られた一郎の姿は、旅のあいだに結ぶ関係性の中でH氏が捉えた一郎の姿なのである。「Hさんの手紙」もまた、「旅」の途中の「使者」からの、ひとつの「報告」ではない。その意味で、H氏が見た一郎の姿をまさしく一郎の「人格」として捉え、論ずることを、「行人」論全篇の中心事に据えることはできない。

漱石は、「行人」という作品を「Hさんの手紙」で結んだ。H氏を登場させずにこのまま「塵勞」を書き募っていけば、次に当然展開が予想される二郎と直の決断の行方を書くことになるだろう。漱石は先の展開が見通されたとき、このあとを続けて書いていくことができなかった。何故なら、二郎と直の「旅」の行く手には自

分にも思ひ及ばぬ「恐ろしさ」が横たわっていることを、作者漱石自身わかつていたからである。「手紙」という独白を通してH氏が「学問とか研究とかいふ側」（塵勞―十五）から一郎の性格を捉えなおすことによって、すべての問題がまとめられたように読者に感じさせる。その一方でこれ以後の二郎と直の「旅」の行方については一切書かずに終える。「行人」結末に据えられた「Hさんの手紙」は、そうした漱石苦肉の策のように思えるのである。

二郎がH氏の手紙に望んでいたものは、一郎が「学者である」自分と「家庭」（塵勞―十五）の中にある自分とをつないでHに語る△ことばVであったのだろう。何故なら二郎は、一郎の苦悩はまさに、「学者」であることと「家族」の一員であることに引き裂かれ、人との関わりの中に自らの位相を選べないところにあるのだと認識していたからである。けれども送られてきた手紙には「学者」であるH氏の意識の枠組みがすくいとる「学問」や「研究」との関わりの中で、それらの問題をめぐって苦悩する一郎が「報告」されているばかりであった。その一方で、二郎が知リたかった「家庭」の中における兄の「思はく」（塵勞―二十一）は抜け落ちてしまっていた。

H氏が二郎の「依頼」に「忠実」（塵勞―五十二）になろうとすればするほど、彼がじかに接した一郎を彼の「人格」として切り取って規定し、「報告」するという結果をひき出してしまふ。それが、「報告」の宿命なのだ。

二郎は、そして直は、H氏が「報告」する一郎の性格規定をもはや求めてはいない。彼らはH氏が捉えたような一郎の姿を、それまでの関わりを通じて十分に知っていたはずだ。H氏の「報告」の

△ことばVからは、「兄」「嫂」「弟」の関係性を新たに模様させる契機となるような情報の何も得られないことを、二郎はよくわかつているのである。

「Hさんの手紙」の中で、一郎は常に「報告される対象者」の位置に立たされていた。一郎とHとの関わりは、「学者」であるHの意識の枠組みによって「学問」や「研究」をめぐる問題に集約される。だからこそ、その観点から「学者である」一郎の苦悩する姿を捉え、規定することができたのだ。その意味では、「Hさんの手紙」は「報告書」として貫徹しているといえよう。

しかし旅のうちには、Hも一郎の苦しい想いをのせた△ことばVに動揺し、窮地に立たされそうになることがあった。「報告者」として関わるHの言動に「故意」を感じて、一郎はHに向かってこう断言する。

「自分に誠実でないものは、決して他人に誠実であり得ない」  
（塵勞―三十六）

一郎は人との関わりにおいて、「自分に誠実」であることを前提にする。相手に「誠を装ふ偽り」（塵勞―三十六）を感じ取ったとき、一郎はその関係性から離れ、孤独に浸るのである。だが、彼が求める「誠実」さこそは、まさしく直の生きようとする姿勢ではなかったか。「自分に誠実」な者とのりわを関望んでいる一郎にとって、直は文字どおり「現在眼前に居て、最も親しかるべき筈の人」（兄―二十）なのである。「自分」の生を生き始めた女と「誠実」を求めて止まない孤独な男は、恋愛のドラマに一番近く、そして遠

いところにいる存在なのかもしれない。

二郎と直が選び取った「沈黙の中の共振」とは、一郎の「解釈」に対する二人の防衛策であると同時に、二人が一郎と共に関わり合えることを願う、一郎へのメッセージでもあった。そして何よりも、二郎と直とが一人の「男」、一人の「女」として直接関わりを開いていく「道」なのである。

今こそ、二郎は直と共に、関わりの場にじかに出会える「個」としての主体を獲得していく「旅」に、一歩踏み出してゆくのである。

「ちや僕等も徐々出掛けませうかね」

「何うです出掛ける勇氣がありますか」と聞いた。

「あなたは」と向も聞いた。

「僕はありません」

「貴方にあれば、妾にだつてあるわ」

(兄二十七)

あの、和歌山へ出発するときの二郎と直の会話は、直の姿が完全に消されてしまった「Hさんの手紙」の後、改めて深い意味の広がりを持って私たち読者の前に立ちあらわれてくる。『行人』という作品の末尾以後、直と二郎が「出掛」ていく「旅」の行方は、H氏が「報告」から完全に抜いてしまった「家」と「家族」の問題を、自分たちの人ことばで表現し、対話しながら、新しい「男」と「女」との関係性をつくりあげていくところにあるのだ。そのために、ある意味では、それまでの「家」と「家族」をめぐる「倫理」と「常識」に縛られた意識の枠組みを、自分の中でも、周囲の人々

との関係の中でも、つき崩してゆく「勇氣」が必要なのでもあらう。その「勇氣」を、今、直と二郎に、私は期待したい。いや、その「勇氣」を私たち自身がもち、この『行人』の「旅」を引き受けていくべきなのであらう。その想いを伝えられる「使者」——「行人」であれたら、と思う。

#### 注(一)

「行人」を「使者」の意味にとり、二郎を示すものであると指摘したのは千谷七郎『漱石の病跡』(昭38・8)である。また、島居邦朗『行人』(『国文学』昭40・8)では、二郎の「見る人、聞く人」としての役割が注目された。これらの提言によって、△「行人」＝「使者」＝二郎▽説が定着したような観がある。しかし、これは『行人』一篇の主題を提示するための二郎の役割を指摘したにとどまっている。私は「行人」として、友人に頼まれて盲女に会いに行った父(帰ってから)、二郎に頼まれて一郎と旅行に出かけ、旅先から手紙を書き送ったHさん(『塵勞』)をも含めて考える。

#### (2)

一郎を中心とする研究は、小宮豊隆が解説(『漱石全集』第十一卷『行人』、岩波書店、昭31)の中で、「主人公の一郎」の「大きな悩みを描き出すことを眼目としてある」としたものをはじめ、片岡良一『行人』(『夏目漱石の作品』所収昭30年刊)、江藤淳『行人』——「我執」・「自己抹殺」(『行人』の孤独と東洋的自然観)、『夏目漱石』所収昭31年刊)、越智治雄「長野一郎・二郎」(『国文学』昭43・2)、小泉浩一郎『行人』論(『言語と文芸』昭43・5)、瀬沼茂樹『行人』(『夏目漱石』所収昭45年刊)、坂本浩『行人』の内在的問題(『戦近代作家と深層心理——漱

石文学の探究——所収昭51年刊、佐藤泰正『行人』——その主題と方法』(『文学』昭55・2)などによって展開され、『行人』論の主流をなしてきた。

これに対して、二郎の存在や二郎と直の心情の交流に注目する動向が、橋本佳『行人』について(『国語と国文学』昭42・7)、遠藤佑『行人』(『国文学』昭44・4)、伊豆利彦『行人』論の前提(『日本文学』昭44・3)などにみられた。また、『家』の属性に注目して論を展開したものに、山田晃『行人』異議(『講座夏目漱石』第三卷所収昭51、有斐閣)、藤澤るり『行人』論・言葉の変容(『国語と国文学』昭57・10)等がある。

## (3)

父の語る「盲目の女」に纏わる話は、二郎に、「報告」をめぐる言葉と人間関係の構図を把握させただけでなく、それまで気がつきにくかった「女」たちの姿を喚起させる契機となったのである。

「他の料簡方が解らない」のが盲目であることよりも辛い、と二十年間抱えてきた苦悩を訴える盲女の姿は、三沢が語った「娘さん」の姿を思わせる。彼女は夫の放蕩に対する苦悩を言葉にできずに耐えた末、精神を狂わし、その後三沢に心の内を口にしたのだった。その姿は、芸者屋の恩に報いるため病弱な体を押して働いた末に体をこわして入院した「あの女」にも重なる。「自分」の想いを人沈黙に封じ込めた彼女たちの忍耐の姿は、和歌山の一夜で自らを「胸抜」と言い、壮絶な死への願望を語った直の苦悩の表白と呼応するものであった。ここにみられる「女」たちの姿は、「鉢植」のように、他人に定められた運命に従うしかなく、自分の意志をもって動くことのできない、「忍耐の像」であったのだ。

## (4)

『鑑賞日本現代文学 第5巻 夏目漱石』昭59・3 角川書店、177頁。

## (5)

たとえば坂本浩氏は前掲論文において、『行人』が前作の『彼岸過迄』と同様に幾つかの短篇をつなげてゆく形式をとることに言及して、「構成上の関心よりも、もっと主人公自身の内面監視へと視点が変わっていることが注目される」とし、「その意味において、『行人』の中心点は『塵勞』の終わりの二十五日分に示ばれていると見ることができる。」「それまでのすべての描写はその中心点に至るまでの行程にすぎないのである」と明言している。